〖 ちょこっと 〗

ちょっと 考えて！ ちょっと立ち止まって！　No 17

悩んだら面白い方へ

毛利衛さんは北海道大学助教授から宇宙飛行士に転身、さらに日本科学未来館館長と新たな仕事へ挑戦続けてきた。館長を退いた今、地域活性化にも取り組む。根底にあるのは宇宙での体験に根ざした、地球と生命の未来に向かう視線だ。

「悩んだら新しいことをやった方がいい。どちらが面白いかを考えて面白い方に進むようにしてきました。この年齢になると黙って同じ生活をすることもできますが、先が見える。だったら新しいことを何かする方が面白い。誰でも経験を生かして社会や次の世代に貢献できることがあるはずです。これまでの経験を貴重な財産にして、楽しみのために一歩を踏み出すことが大切だと思います」

「宇宙では常に死と直面しています。しかし地球に戻ると、たとえ裸でも案心して生きられる。貴重な環境であることを、もう一度みんなに思い出してほしい。SDGｓ（持続可能な開発目標）の取り組みもされていますが、ウクライナのように戦争になるとそれどころではなくなります」

「宇宙から戻り、世界中の名もない人々の活動がつながって過去から命を紡いできたことに気づきました。微生物から人間まで、すべての生命は互いにつながりながら必死に未来に命をつなごうとしています。人類だけでなく他の生物も含めた『地球まほろば』を持続することが、私たちに課せられた共通のミッションだと思っています」

「館長をやって科学技術の限界も感じました。多くの研究者や経営者に会いましたが、人類全体のことまで考えている人は少ない。個人の寿命は 100 年ほどですが、人類は知恵を集めて命をつなぎ何万年も繁栄してきました。この知恵のひとつひとつが文化だと思います。文化としての科学を生活者にどう伝えるかを考え、直感でわかる科学館づくりに取り組んできました」

「地域の目の前にもＳＤＧｓに関わることはいっぱいある。私の出身地の余市でワイン造りが盛んになったのも気候変動の影響です。地域の科学館をそうしたことを話し合う場にして、地域活性化につなげたいと活動しています」

日本科学未来館名誉館長　毛利 衛 氏

人生100年の羅針盤　日経新聞　より

私は今年 70 歳になります。定年後米づくりを初めて 10 年、NPO 法人 結 倶楽部をつくって 8 年になります。次の 10 年に向けて面白い方に進みます（地域の方々と）

菅平米園　園主 須田 正一